Imagic

天カケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｍａｇｉｃ

【Ｎコード】
Ｎ６３０６Ｊ

【作者名】
天カケル

【あらすじ】
どこにでもいそうなちょっとだけスポーツができる大学生、藤堂（とうどう）猛（たける）。
ある日バイクにのって走っていると落雷にあい大事故を起こすもなんと奇跡的に無傷だった。
それをきっかけに不思議な力を手にした彼、そして大事を取って入院した病院の向かいの棟にいた不思議な女の子山野ミドリ（やまのみどり）との出会いから彼らの不思議な物語が始まる。

出会い（前書き）

数年前に書こうと思って書き出したけど暫く放置していた小説です。とりあえずＵＰだけしておいて不定期にタラタラと更新していく予定です。

出会い

俺の名前は藤堂猛（とうどうたける）、どこにでもいる冴えない大学生だ。
イケメンと言われるが性格が偏屈、頑固で彼女はもう5年ほどいない、更に筋金入りの負けず嫌い、中学生・高校生の頃は子供のとき友達に喧嘩が負けたのが悔しかったのがきっかけで始めた空手と柔道ではどちらも才能は無かったのに負けん気だけで全国大会に出れたほどだ、中学・高校は毎日部活で汗を流し、柔道で全日本中学、空手でインターハイにも出た、しかし不幸なことにどちらも優勝候補に1回戦で当たって何も出来なかった、大学でもどちらかをやるかどうかは正直迷ったけど、残念ながらギリギリ全国大会に出れるレベルの選手じゃ相手にされない、しかも大学に入ってまで体育会系の汗臭い上下関係には関わりたくない。
あん時は毎日輝いてたな・・・
そんな日々もあったから余計にただ通学して帰って、たまにバイトして遊んでの毎日が退屈すぎた。

あの日までは・・・

第一章：出会い

今日もいつものように5限を終えて地元に駅から家までの暗い道のりを歩いていた。
しかしあいにく雨だ・・・うちは駅からバイクでも15分は軽くかかる、「雷」も鳴っているがおそらく母親に電話しても普通に帰って来いって言われるだろう、しぶしぶびしょぬれになりつつも原付にまたがった。雨粒が顔に当たるのが痛いが早く帰りたいので50キロの道路で80キロほど出していた・・・次の瞬間！！

「ピキーーーーーーーーーーーーッン！！！」
目の前を今まで体験したことのないほど衝撃が体に走り、とてつもない閃光が俺を包んだ・・・
そして数秒後、薄れ行く意識の中で道の真ん中、冷たいアスファルトの上に転がっているのは分かった、遠くにバイクが燃え上がっているのも見える。なにが起きたのかが分かるのにはそう時間はかからなかった、雷に打たれたんだろう・・・
意識が飛ぶか否かの頃、救急車の音がかすかに聞こえる・・・
「俺、死ぬのか・・・」
そう呟いたか否かは分からない、しかしそのようなことを思いながらも意識を保つことは難しかった。

「タケル！！！！タケル！！！起きて！！」
誰かが涙ながらに俺を呼ぶ声がする、聞いたことのある声だ・・・
彼女？いいやちがう、もっと、生まれる前から聞いてた声だ・・・
第一俺に彼女なんか高校1年生以来いない。
そっと目を覚ますとそこは病院、母親が俺の手を握りながら丸2日半俺の名を呼び続けていたらしい、どおりで手が痛いわけだ・・・
しかし雷に打たれて80キロで走るバイクから落ちたんだ、もっと痛い箇所があってもおかしくないが・・・握られていた手以外どこも痛くない、デニム生地のジャケットとパンツを履いていたにしても擦り傷すら見当たらない、そうこうしていると担当の少し小太りで良い人そうな医者が病室に小走りでやってきた、すると来るなり、
「奇跡だよ！！目撃者に聞いたら80キロ近く出しててバイクから転んだらしいのに無傷なんて！！嘘かとおもったら警察の現場検証でもそれくらい出してたはずだってね！」
興奮気味に医者が話しかけてくる。
「あぁ、はい・・・」
とりあえず眠いので適当に流したがまだ話しかけてくる、
「あぁ、でも目覚めなかった時はもうだめかと思ったよ、頭を強打

してたからね・・・記憶はちゃんとあるかい？この女性はだれだかわかる？」
っと母親を指差して医者は言った。
いたずら好きな俺はわからないふりでもしようかと思ったけどさすがに目に涙を溜める母の前でそんなことやったら洒落にならんと思ったので、
「あぁ、はい・・・母です・・・」
そう答えると医者は安心した表情を見せて
「あぁ、よかった、重度な記憶喪失の心配は無さそうだ、でも念のためまだあと2週間は入院だね。」
医者はそういうと、母親と目を合わせ相槌を打った。
「じゃあゆっくりしてるんだよ、またそのうち来るから」
そう言うと医者は来た時とは対照的にゆっくりノシノシと部屋から出て行った。
「ホントに良かったわ、母さん忙しかったのに2日も会社休んじゃったわよ、でもホントに良かった、まだ心配だから今日はここにいるわね。」
と、母さんは言ったが正直大学生にもなって病室に半日中母と一緒では逆にリラックスできない、
「いいよ、会社の人にも迷惑だから会社いったほうがいいよ、俺はホントに見てのとおりなんともないからさ！！」
そう言って5分ほど説得すると母はようやく折れて午後から会社に行くらしい。
「んじゃ、俺は昼までちょっと寝るわ！それじゃおやすみ！」
3日近く寝込んでいたが病院のフカフカな布団なら何時間でも寝れる、俺は眠りについた。
しかし30分もしないうちに目が覚めた、「あの時」の光景がフラッシュバックしてくる、すっかり目が覚めてしまったが母は既にいなかった。
とりあえず布団に入っているがすることがない、ゲームも好きだが

そんなものもって来ているはずが無い、しかしさっきからなんだかずっと体にまだ電気が残っているようなムズムズした感じがする・・・残尿感ならぬ残電感とでもいうべきか、電撃でも打てそうな気がする。
昔からロールプレイングゲームや魔法だのなんだのってのが、表に出しはしなかったもののファンタジーな妄想をするのが大好きな俺、要は隠れゲームオタクだ、だれもいない病室でもう一度だれもいない、来ないのを確認すると。
人差し指を上に掲げ、こうささやき声で叫んだと同時にその指を窓ガラスに向け、
「サンダー！！！！」

「・・・・・・・・」

さすがに出ないよな・・・いつもと変わらぬただの妄想だった、雷に打たれるなんて宝くじの当選の何倍もの確率の事に見事当たったんだからなんか特殊能力とか魔法とかみたいなの使えるようになっていると少し本気で期待していた・・・
「あぁ～あ、暇だなぁ、しかもこのムズムズホントにうざいな・・・」
そう呟いた、しかし本当に妄想くらいしかやる事が無い・・・もう一回やってみるか、今度は・・・あの某有名ＲＰＧみたいにやってみよう、と再びテレビゲームのような妄想を始めると低いトーンでこう呟き始めた、
「天光満つるところに我はあり・・・」
さっきと同じように指を天井に掲げ、窓に向けて振り下ろし、
「これで終わりだ！！！インディグネイション！！！！」

すると！！

「バァーーーーーーンッ！！！」

指先から弾丸の如く青白い閃光が放たれ窓ガラスを突き破り俺は反対方向に軽く吹き飛んだ・・・

何が起きたのかしばらくわからなかったが少し経つと警備員と看護師数人が病室に飛び込んできて事態を把握した、大変なことをしてしまったのはわかる、しかし血相を変えるどころかドキドキワクワクしている、そう「雷」が打てたのだ・・・

俺はおそらく警備員に怒られる、しかしそんな「魔法」なんてことを言ってもまともな人間が信じるわけ無い、それこそ精神科送りだ！ここはなんとか上手い言い訳を考えないといけない・・・

「どうしたんだ！？何が起きた！？窓ガラスが割れているじゃないか！！やったのは君かい！？」

いかにもキレ気味の口調で力強く警備員は言った。

「はい、すみません・・・ボールを持って投球のイメトレしてたらホントに飛んじゃいました・・・」

頭を掻き苦笑いしながら口から出た言い訳はかなり無理があったが、

「そうか、病院内で退屈なのはわかるけど君は一応病人なんだ、病院の中なんだからそんなことしたらいけないよ！」

と警備員は言った、このかなり無理のある言い訳を信じてくれたのだ、とりあえず最大の難は逃れた・・・

まだムズムズ感、残電感は残っている、恐らくもう一度同じように唱えればまだ出そうだ、しかしさすがに病院内でもう1発は無理だろう、かといってアレが一体何なのかもまだ正直自分でもわからない、外で撃って人に当たったら窓ガラスどころの騒ぎじゃなさそうだ。

退院まではおとなしくしておこう。

しかし退屈だ、今日で目覚めてから4日目だ、妹にたのんで持ってきてもらった携帯ゲーム機のソフト3本も全クリしてしまった、か

といって勉強なんてするガラじゃない、病院内を探検してみよう！
！いい大学生の考えるような事じゃないが、これがまぁタケル様ク
オリティといったところだ。
なぜかというと凄く気になる人が向かいの病棟にいる、毎日窓際で
本を読んでる長い綺麗な黒髪の女の子だ、俺も毎日窓際でゲームを
してたし何回も見つめてたので２，３回目が合った、あわよくば知
り合いにでもなろうという魂胆だ・・・向かい側の部屋の扉の前に
着いた、
「山野ミドリ・・・かぁ」
山の緑・・・なんかとってもネタにされそうな名前だ、さすがにい
きなり入って友達になってくださいは無理だろう、でも明日退院だ
ったらどうしよう・・・
色々と１０分近く扉の前で考えていたら、
「お友達かな？」
看護師さんだ、入院中なのに私服で病院内をうろついていたので面
会とカン違いされたらしい、
「あ！いえ、ち、違います」
俺は何も逃げるようなことはしていないのになぜか病院内を全力で
逃げた！！
病室に帰り彼女の部屋を見てみると先ほどの看護師さんと笑顔で話
している、あの笑顔もまた可愛い・・・。
外も暗くなってきたので彼女はカーテンを閉めた、そして俺も閉め
て特にやることも無いし今日は寝ることにした、
「明日はなんとか話だけでもするぞ！！」
そう意気込むと余計に硬くなる。
次の日は２１時頃には寝たはずなのに起きたのは正午よりすこし前
だった、カーテンを開けて今日も彼女に癒されようとおもった、し
かし！！
いつも窓際で本を読んでいるはずの彼女はいない！急いで着替え昨
日の病室の前までいってみると昨日書いてあったはずの「山野ミド

リ」の名前も無い！！大変なことをしてしまった！！退院してしまったのか？何故昨日あの時部屋に入らなかったんだ・・・落胆していると昨日の看護師さんが再び通りかかった、
「あ、君は昨日の子じゃない」
看護師は言った、そして俺は間髪入れずにまだ全力で走ってきたため整ってない呼吸のまま、
「そ、そうです！それで昨日までここにいたミドリさんは退院しちゃったんですか！！？」
すると看護師は笑顔で、
「やっぱり友達なんじゃなーい、退院してないわミドリちゃんなら個室から下の階の６人部屋に移動になっただけよ、今から行くから君も一緒に行く？」
「へ？」
俺は拍子抜けしたと同時になぜか物凄く安心した、
「ついてらっしゃい」
言われるがまま俺は看護師についていった、
「あの子の大学のお友達？それとも高校、中学？」
看護師に聞かれるが俺はなんて言えばいいんだろう、
「んー、えーっと・・・」
「もしかして彼氏さんかな？」
俺は顔を真っ赤にして、
「いえ！ちがいますよ！！そ、そうじゃなくて・・・」
俺は話の経緯をすべてはなした、すると看護師は
「あはは、なんかドラマみたいね、歳も近いみたいだしお友達になっちゃえば？ミドリちゃんとってもいい子よ。」
そうこうしてる間に下の階の６人部屋についた、
「ちょっと待っててね。」
看護師は言うと数十秒後に俺に手招きをした、
「タケル君、ミドリちゃんとお友達になりたいんだってさ！歳も近いみたいだしなってあげてくれるかな？」

そう言うと看護師は俺に自己紹介を促す合図か、肘で俺の腕をつついた、
「あ、こんにちは！藤堂猛って言います！向かいの棟の３０２号室にいます、いつも窓際で本をよんでるあなたを見ていていつかお話とかしたり友達になれたらいいなと思っていました！！」
ガチガチだ・・・すると彼女は笑顔で、
「ふふっ、知ってますよ、私もそう思ってました、歳おいくつなんですか？私は今年でハタチですけど。」
「え、えっと・・・俺も今年でハタチの・・・法南大に、２年生です！！」
「え？法南大ですか？私もですよ、偶然ですね！けど今年は４月から学校いけてなくって・・・留年です・・・。」
少し悲しそうに彼女は言った。
「そうなんですか！は、はやくた、退院できるといいですね！！」
ガチガチの俺に対して彼女はまた笑顔で、
「そんなに緊張しないでください、もっと楽しくお話しましょ？いつもなんのゲームやってたんですか？」
「えっとー、全部ＲＰＧです！ミドリさんはゲームするんですか？」
「私機械とかダメですから・・・でもやってみたいですけどね、ＲＰＧみたいな話の本は好きなんで良く読むんですよ、指輪物語とか。」
お！これならイケル！！俺も『北欧神話』『指輪物語』『アーサー王』とかゲームの元ネタになったような本は大体読んだ、
「あ！なら話も合いそうですね！」
ガッチガチで気付かなかったがいつのまにか看護師さんは空気を読んでどっかに行ってくれていた、すると俺と彼女は円卓の騎士の話でその日はずっと盛り上がっていた。
「明日もきていいかな？」
「うん、いいよ！私もそのうち３０２号室に遊びにいく！」
いつの間にか打ち解けていた俺たちは言葉も堅苦しくなくなってい

た。
その日の夜、
「あ、そういえばミドリのクラスは裕樹と同じだな・・・あいつにあの子の事色々聞いてみるか！知ってるかなぁ・・・。」
裕樹とは木村裕樹、俺の高校の友達、柔道部でインターハイ入賞して今も大学で柔道をやっている、地元は違うが俺も中学で柔道をしていて階級も同じだったのでそのころからお互いを知っている、うちの県の中学では俺達は3年間2強と言われ続けていた！俺が空手部に入って毎日練習していてもいきなり空手の胴衣掴んで柔道の乱取をおっぱじめる豪快なやつだ・・・思いっきり豪快な技でやりかえすとわざと派手にかかって、それを言いがかりにして高校時代はあいつに千回くらい柔道部に来いと誘われた。
「おまえのクラスの山野ミドリって子知ってる？どんな子とか話聞いたことない？・・・送信！」
五日目にしてようやく入院生活がワクワクしてきた、あと9日間でもっと仲良くなろう！今日は寝よう、明日が楽しみだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6306j/

Imagic

2011年1月4日04時23分発行